

# 學生會議通信

NO. 31  
68' 12.

東京教育大學

## 學生公議

大衆団交実現へ向けて  
前進しよう

教育大學の生徒の立派な論文、我々は乃回答に對して、全學斗全體を襲つた動搖と混亂を我々自身の主体的な責任において、はつきり

情セの変化とな、情報収集の不十分性となによつて  
自己の誤認を合理化し、居直ることによつては現在  
の困難な局面を打開していくことは決してできぬ。  
ことを再確認しなければならぬ。

3日のクラス代表者会議において我々は次の様な提起をなしていった。即ち我々は既に提案され、いた事務局の我々の予備折衝に対する提案の混乱

抗争の実質的な運動の場面においては「予備折衝」を公論にし、該題を七項目要求とする事によつて、実質的には大衆団交にして「ぐとこう」と強調しつつ、②一方においては、これな28回答の「星等集会」を基本的に受け入れることにより、③の「予備折衝」に対して条件をつけていくという反対した方向性の両者を自らせ持つてゐることを追求していふのである。それは「田条件」そのものの、論理的に云つて、予備折衝において大衆団交の条件として主張しようとする事と、その予備折衝をもつての「田条件」の下で、事務局は行為したことになるけれど、こと、二つの内容を極めて二種類のものとなつたのであつた。

該款を七項目要要求にし、「実質的に大衆団交にす  
る」ということによつて事務局の「战斗性」を誇示  
しつつも、その内実において2回目を受け入れ、そ  
の条件を少しでも有利にしていくことをする。政治技  
術主義的な発想とその手直しの結果としてあること  
を我々は批判せざるを得ない。我々はこのことか  
ら回答に直面したときの（我々をも含めて）大きさ  
動搖のなし崩し的修正としてあることを指摘し、さ  
らに事務局の提起そのものの誤認として批判しなけ  
ればならない。

斗としてではなく、文自斗として臨むといふことの  
板倉と作つてゐるのである。したゞめ何らかの折衝  
を提起された場合に、その折衝に臨むしといふこと  
は、実質的にば、各回等と同じ内容の折衝に臨むこと  
もあり得るところ、際限のない后退の危険性さえある  
のだ。本日の理、教、農各学部の学生大会において  
民青系諸君が現実に「ヒレ」に対する代表団決定を提  
出するとか確実なたゞにあつて、このよう少指導  
によつては、民青の策動そのものと対決するのでは  
なく、なんとなして一名の代表をくり込ませようと  
する28回答のワクのなまでの対応しか見えないの  
だ。

による程乱ではなしに、二九三〇日段階での二八回答に対する全くの日和見的の方針提起と明確に否定的に対するのを遙かに技術的な手直しによって、なし崩し的に修正していくとする癡想そのものの畢りとして残りません。その必要があるところ。その

讀一として手に付てよく必要がある。それで、この現状ある二八回筋に対する  
大衆的強化にちなんないだろ。

今大衆は父兄実現に向け心懸力お供えせよ!!  
學友諸君!!我々もあくまでも全學斗そのものの強  
化を勝ちとり、漸進移転終止に向けての我々の隊列に  
を打ち固めていく、との様な立場から全ての學友に  
我々の斗う方針を提起したい。

2. 国富は前回を以て、日本政府の各種方針等に對する意見を呈しつつも、その内容は伊万里に「金葉集会」を捲木しただけのものであることをはつきりみておかねばならない。そしてはは密における予備折衝の形式

て、27回目はA、B、Cと三段階にわたることによって緻密化し、学部自身の分断へ実際には全學生と民青の分断へを利用しながら、全學斗を文官斗に落し込める事により、斗ラ部隊を締め出さるこうにしていいのだ!! 評議会は民青との間に全學集会——全學協議会路線で一泡かせ物と反全學斗アローグを形成し、何んとから、ひ土地確保求る自派徹底——審議私廃止の方向性の癡徹を回避しつづけといふヒミツはつきりヒミツをおかなければならぬ。

事務局は、理學部教員から「修正案」の提起を足がかりにして、この2回目の実体びつ全學集会しがあり、他のことは餘も次まつていふんだといふうの分析を最近に於て小説化してゐるが、それは2回目が1回目の上に「全學集会」を基木して「ある事をへ顕微鏡にかけ見落すことによつて」、「何等ものに放動的な予備折衝に対する条件がつゞいた事を起させた」の回目に對する云わば条件斗争を合理化しようとしているが、それは分析の傳典であると云はねばならぬ。

このような分析にて、我々は28回講話をはつきりと既存し、そして今後斗による大衆団々を要求していこうではいかないが、我々が方圓界を拒否するところとは常に愛の意味において拒否すれば良いといふことでは無い。されば2回者の歎属性と計算を、これにてると、とにより、その筋動の一環を拒否する多くの学友に全學研製氣体導管に立ち並びて、本來なる想をへります。一方民育本道も、この精神的な問題をめぐつて敵隊的に展開する。

新進、中間難女の方面にケンカを打つ  
の学友を我の隊列に結果させることで

した我々の向自的な活動により、二学斗内部の動搖をも定服していく内容をもつてゐるんだといふことを我々はほつきイ確認しようではないか!! 二八回答への徹底した暴露と全學校試験路線を一つの具体的な因連性をもつたものとして想えられし、二八回答への拒否が評議会一民青下ロマクによる全學斗への緊急に対する我々の痛烈な反響であるからだ。我々はその上に立つて、全學斗による大報團交與現のスローガンを高々とかかげ、この方針のもとへの大衆の組織化を大胆に押し進めいかねばならぬいたり。

全ての学友諸君!! 三日付コムソモールは我々の誠実な綵括の上に立つて、全く実践的な方針提起へ前に、ジトやケをへながらも下批判ならぬ批判して  
もつて居直ろうとしている。

を不審にしていふと言ひたいようである。専大創立者  
これは全く驚きである。既に既に二日付「学生会  
議通信」で二八回書へられたの日和見を自己批判し、

一四回答以旬の我及の立場を明確に繰括する中  
から、その亮服の方向性を明らかにしているからで  
ある。我々は「自らの立場的な据下げを欠落」させ  
てはいるのは、並に共学の諸君にそつくりそのまま  
あてはまることがとまねざるを得ない。全く二八回  
答以采が彼らの「立場表記」はその「立場」が常に  
「コント」と「ホス交際結果」であることにより正政道